おいでませ冒険者！

月島瑠奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おいでませ冒険者！

【Ｎコード】
Ｎ０４１６Ｕ

【作者名】
月島瑠奈

【あらすじ】
爆裂庶民は今日も行く。冒険者が活躍する世界の庶民視点で描く、異世界庶民派ＦＴ。冒険者も魔王もなんのその。庶民は案外逞しく生きている。

1

「ふっふっふ……。あんたらがこれに弱いのは調査済みなのよっ！」

じりじりと太陽が肌を焼きつけるる真夏の午後。

炎天下の下、火の粉を撒き散らしながら燃え盛る松明を手にしている少女の姿があった。汗をだらだらたらしながら奇妙な笑みを浮かべている。かなり異様だ。

対峙するは赤い半透明のゼリー状の生物、俗に「スライム」などとよばれており、戦闘能力に乏しく、遭遇してしまったところで命の危険に晒される事はなく、人体には殆ど害の無い最弱のモンスターとされている。しかし、少女、エリスにとっては大事な畑を荒らした憎き敵でしか在り得なかった。

松明を手に、じりじりとスライムに近付くエリスと、本能で危機を察し、後ずさるスライム。

「大事な野菜さん達を荒らした罪は万死に値するわよ！　覚悟なさい！」

勢い良く振り下ろされる松明。スライム達は直前でそれを交わし、奇声を上げながら、あれよという間にぴょんぴょんとせわしなく逃げ去った。視界から憎き敵が消え去るのを確認すると、エリスはにっと口の端を上げる。

「ざまぁみろっ！　スライムの分際で人間様の畑荒らそうなんて考えるからよっ！」

憎き存在を退け、上機嫌のエリス。しかし、最弱なモンスターを退けた所で、何の自慢にもならないのが現実。そんな事は微塵も思わない彼女は近くにあったバケツに火のついたままの松明を乱暴に放り込んだ。激しい音と気泡を上げ瞬く間に火が消え、瞬時に中の水が蒸発する。勢い余って倒れたバケツからは白い蒸気が立ち上ぼる。

エリスは小柄で茶髪、ぱっちりとした緑の双眸とかなり美少女の

部類に入る容貌を持っている。しかし、その外見と中身は相反しているようである。
「さて……と、これからどーしよーかなー。網張ったところであいつら通り抜けちやうだろうし。かといって蓋とかしたら空気が入らなくなっちゃうし。大体そんなでかいモン作ったらお金無くなっちゃうし……。ああっ、もお！」
地団駄を踏もうとし、思いとどまる。上げた足元には青々と広げている野菜達。運良くスライム達の侵略を逃れた物だ。
「あーあー。野菜高いのに……」
がっくりと肩を落とし、地面に視線を落とすエリス。しばらくその姿勢から立ち上がる事が出来なかった彼女を正気に返したのは、リンリンと高らかに響く鈴の音だった。
「はいはい、只今っ！」
慌てて髪を整え（無駄なあがきであったが）建物と菜園を繋ぐ勝手口より中に入り、明かり取りの小さな窓が一つだけある薄暗い部屋を潜りぬけ、更に扉を開ける。
「お待たせ致しました！！冒険者の宿、『ターシェン』へようこそ！！」
それは先ほどスライムと対時した時とは打って変わって可愛らしい笑顔だった。老舗の宿『ターシェン』の看板娘、エリス＝ターシェンお得意の変わり身は今日も健在である。

＊　　＊　　＊

「いつもながら見事な営業っぷりだねエリス。注文の品持ってきたよ。」
あきれたように一実際そうなのであるが一冷静な突っ込みを入れるのは、年の頃はエリスと同じ位の少年。つりあがった茶の双眸、肩にかかる銀の髪を無造作にひとまとめにしている。足元には質素な木製の箱が一つ。

扉を開けた先にまず現れるカウンターに両手を突きながらエリスは深く溜息をついた。
「何だ、リイダか。何か用？」
「……今言ったし、見たら解るだろ……」
長机の上にどかっと箱を下ろしながらリイダはエリスを睨んだ。
「や……やだな一冗談よ。お仕事ご苦労様っ」
「全く……。後払いで良かったんだよね」
確認するリイダに、「そうだよ」と頷くエリス。
「えっと、キュアリフ（一般的な傷薬）五十に、毒消し三十に、気付け薬二十、万能薬十五…で合計９６８０リーク（注：この世界における金額の単位）ね」
商品を見せながら金額請求をするリイダと、顔色を変えるエリス。
「……ちょっと待った。……８８００の間違いじゃないの？」
「さすが、金勘定に関しては目ざといね」
「誤魔化しは無用よ。それとも私の計算が間違ってるとでも？」
リイダの胸倉を掴み詰め寄るエリス。
「放してくれる？　…確かに言う通り８８００が正解だよ。…おとといまではね」
「どういうこと？」
胸倉から手を外し、訝しげな表情を露にするエリス。言いにくそうに顔を一瞬背け、リイダが疑問に答える。
「昨日からうちの全商品に一割の税金がつくことになったんだ。だから８８０加算で、９６８０って訳」
「い……いっいっいっいっいっ……、いちわり！？」
余りの絶叫に思わずリイダは両の耳を塞いだ。余波による振動が収まるのを確認し、手を外す。肩で息をしているエリスをなだめながら説明を続ける。
「冒険者への給与が上がるから、だってさ、最近モンスターによる被害が拡大したっていうじゃない。その分冒険者の労働も増えるからね。納得は行くけどね……エリス？」

どんどん表情が曇って行くエリス。
「……冒険者、冒険者って……どいつも、こいつも、冒険者ばっかり立てやがって！」
はじまっちゃったよ。思いながらリイダは側の椅子に腰掛けた。長い話になるので立って聞くなど、出来ない。
「街中どこいっても『冒険者優遇！』とか『冒険者証提示で半額！』とかさ。そりゃ、世の安全守ってるお偉い職業かもしれませんけどね？誰のお陰で仕事できてるのかよおおおおおおおおっく考えてほしいもんだわ！」
リイダはエリスそっちのけで注文品の数を確認している。
エリスの熱弁は留まる事を知らない。
「わたしら宿屋が休息の場を提供してるからでしょ？！　リイダんちみたいな道具屋が薬草を作っているからでしょ？　なのにこの扱いの差はなんな訳？　私らだって労働者なのよ！　ねえリイダ」
「まあね、ああ、そうそうエリス。ウチは売ってるだけで作ってはいないから。それよりお金。９６８０リーク」
飽くまで落ちつき払っているリイダ。
「ちょっと！　あんただって私と立場は一緒なはずよ、何悠長に構えてるのよ！」
「国に立てつく度胸はないよ。それより、９６８０リークが貰えなければウチがやばいから。そっちの方が大事だよ」
手を差し出すリイダ。しかし、調子が下がりながらもエリスの愚痴は続く。
「大体さ～。強いモンスター排除するのもいいけど、畑荒らすスライムもなんとかしてよねって感じよ。結構切実なんだから」
「何のことさ？」
尋ねるリイダにことの経緯を説明するエリス。リイダは難しい表情を浮かべながら注文の箱の中から白い紙の小さい箱を取り出した。
「何それ？　あ、もしかしておばさんの手作り菓子？」
手を組んで喜びを表現するエリス。領きながら、暗い表情のリイ

ダ。
「……うん」
「……何よ？」
「今の話聞いてたら渡しづらくなった」
「変なの。で？　今日の中身は？」
一瞬間が空き、答えるリイダ。
「木苺のゼリー」
エリスの心に北風が通って、しばらくした後、黙ってエリスは長机の上に木の札を置いた。そこには『只今準備中』という文字。エリスはまっすぐ出入り口へと向かう。首を傾げるリイダ。
「どこいくのさ」
「ルカのとこ」
エリスは捨て台詞を言い、そのまま外に出ていってしまった。
「って、おい！　勘定は！　こら、待てエリス！」
リイダも慌てて、エリスの後を追った。

2

白塗りの質素な教会。その中は明かり取りの窓から射し込む僅かな陽の光が灯っており、厳かな空気が支配していた。その片隅に通常の礼拝堂からは見えないようにその部屋はある。銀の燭台に据えられた蝋燭の僅かな光が灯されるばかりの狭い室内は、さらに一枚の木の壁で二分されている。その木の壁には窓が取り付けられ、会話をかわす事が可能になっている。

ここは、『懺悔の小部屋』。自らの『罪』を神に全て晒し、赦しを請う場所。本来は。

＊　＊　＊

「神の御前においては嘘、偽りはあってはなりません。全てを神に委ね……貴方の思いの内を示しなさい。エリス＝ターシェン」

小窓から高く澄んだ心地よい少女の声が聞こえてくる。聞くだけでその全てを委ねてしまいたくなる、そんな気さえ起こさせる。

「……はい、シスター＝ルカ」

対する、茶の髪の可愛らしい声の持ち主の少女、エリスは組んだ両手を小窓に据え付けられた台に乗せ、軽く頭を垂れる。沈黙。じりじりと蝋燭が燃える頼りない音が響き渡る。そんな中、その雰囲気を一掃するかの勢いでエリスは話し出した。

「別にさ、冒険者制度そのものを批判する気はないのよ？　それぞれの理由はどうあれ、魔物を倒して街の被害を最小限にしてくれているのだろうしね」

「スライムは平気で見かけますけどね」

ルカにとってはさりげない一言であったが、エリスにとっては聞き捨てない台詞だった。

きっと顔を正面に挙げる。その表情が険しかったのか、あらあら

どうなさったの？　とルカの声。
「……奴らの事は言うな！　あいつらのせいで……当面の生活は曇り空よ……」
　苦い表情を惜しげもなく露にしながら、事の顛末を話すエリス。うんうん、頷きながら「まあ、それは大変でしたのね」とさらっとした口調で返すルカ。それをみながらエリスはルカを恨めしげな表情で見つめながらぼやく。
「あんたって人は……。困っている友人に慰めの言葉一つも言えない訳？」
「あらまあ、エリスってば。わたくし、今さっき大変でしたのねって言いましたわよ？　忘れんぼさんですのね」
「……心がこもってないっ！」
「それは貴方の受け取り方が問題なのですわ。わたくしは、『ターシェン』が被った被害を心からお気の毒だと思っていますわ、言い方よりもその言葉の意味を重んじなさいませ、エリス」
　肩に掛かるくらいのまっすぐなアッシュブロンドの髪、透き通るような碧眼。見た目は慈悲深そうな清楚な乙女なのに。反する毒舌っぷりに、出てくるのは溜息だけだ。シスター＝ルカことルカ＝タマルは村の教会のシスター見習いであり、エリスとは無二の親友同志である。……これでも。
　並外れた神聖術を秘めている（らしい）という理由でこの教会にシスターとして迎えられた、という経緯を持つ彼女。ただ、本人はこの仕事に対する関心は薄い。その証拠に彼女はしょっちゅうエリスに自分の夢を「お嫁さん」と言っている。「神に嫁ぐ身」であるはずのシスターとしては不謹慎極まりない発言だ。
　そんな彼女がシスターとしてやってこれているのは、神聖術と巧みな話術、加えて「天使の微笑み」と称される（エリスとリイダは「悪魔の微笑」と呼んでいるが）見るものを魅了してやまない清楚な容貌、鈴を転がすような笑い声を持ち合わせている結果に他ならない。そんな彼女がシスターをやっている事は知り合ってからの唯

一であり最大の謎ではあったが聞いてみても、「自分の特技を生かせる職業だったから」としか教えてはくれなかったし、またエリスもリイダもあまり詮索するのを好ましいとする性格でもなかったので、いつしか聞くこともなくなり、今に至っている。
「それよりもエリス。モンスター対策で悩んでいるのでしたら、こちらはいかがです？」
「……何コレ。鈴？」
「魔よけの鈴ですよ。神聖術が込められているんですわ」
「へぇ～。いいねぇ～（本当だったらね）」
ちりん、ちりんと見た目は普通のものと何ら変わらない鈴を鳴らしながら、興味津々なエリス。
何だかんだいって考えてくれてるんじゃん、と喜びの感情を覚えた矢先に飛び込んだ友人の言葉にエリスは再び恨めしげな目をさせられる事になる。
「今なら特別奉仕価格三万リークで結構ですわよ！」
「……は？」
脱力したと同時に手に持っていた鈴が落下し、カシャンという鈍い金属音が狭い懺悔室にこだまする。それを聞いたルカは壁の向こう側、すなわちエリスのいる空間へと移動してきた。
「ああ、もう大事な商品なんですから、手荒に扱わないで下さいな」
「んなっ、だって三万リークってあんた……」
そんな金があったら野菜畑荒らされたくらいで嘆いたりはしない。
「ぼったくり！　それぼったくり！　教会がこんな事していいの？！」
「そうはおっしゃいますけどね、エリス。神聖術って精神力使いますのよ？　人件費ですよ。人件費」
「大体それ、効き目あるの？それが一番問題」
「さぁ？　正直売れないので何とも」
当たり前だ。誰が、こんな両の掌に収まる大きさの鈴に三万リークなんて大金を払うのか。（ちょっとときめいてしまったが）

「あのね、ルカ。勝手に税金増やされたぐらいで支払いを躊躇っている私から三万リークをぶんどるって良心は痛まないの？！」
「悪いな、とは思いますけど。でもそうしないとこちらも生活できませんから」
「解らないでもないけど三万リークはないでしょ、三万リークは」
それだけあったらとりあえず、普通のご家庭であれば半年はゆうに暮らせる。質素倹約が基本の教会であれば余りある金額のはず。
「そんな事言ったって私達シスターだってたまにはお洒落したり、お肉のある食卓に憧れるのですわっ！」
目をうるうるさせながら羨望の眼差しを向けるルカに対し、別の熱いものがこみ上げて来るエリス。
「ってそれが本音かっ！」
基本的に質素倹約、となれば野菜より値が張る肉類は当然敬遠されるものであり、一教会と言えば菜食主義という印象が根強いが今現在はそうとも限らないらしい一食卓に出るのは野菜と穀物類ばかり。
そんな生活をしているルカにしてみれば、少々野菜が消える事など微塵にも気にしない。むしろ、見飽きている。だから、それほど友人の危機にも反応しない。そういうことだ。
「あんたの食生活はよく知らないけどねっ！　こっちは切実なのよ！」
「こっちだって切実ですわよ！　第一、エリス。あなたさっき勝手に税金増やされてとか言ってましたけどね。そのことなら一月前から村のお知らせ版に掲示してありましたわよ。あなたいっつもみないんだから」
この台詞には言葉を詰まらせるエリス。確かに、見てはいなかったような気がする。いや、見ていない。だって、あのお知らせ版って滅多に掲示物張らないし。『ターシェン』からは微妙に離れているし。
「でっ、でもそれなら商売しているウチにお知らせが来ないのはお

かしい！」
「だって貴方のところは『冒険者の宿』でしょう？　冒険者が使用する施設で税金分宿代を徴収したら、昇給の為の税金徴収なんて意味が無いじゃありません事？」
　この世界で『宿屋』と呼ばれる施設は大きく通常の『宿屋』と、『冒険者の宿』に2分される。前者は通常の人間が野宿を避けるために夜を過ごす場所として。後者は冒険者が疲れを癒すための場として。詳しい仕組みは解明されていないが、『冒険者の宿』で使用されている寝具には体の疲れを癒してくれるという不思議な効果がある。とは言え、怪我や病気を治してくれるという訳ではない。そんなものが存在しえてしまえば世の医者は全て廃業である。
　とにかくも、高価なシロモノなので、冒険者証を持っている者しか使用できない。通常の宿屋よりは高い宿代を請求するとは言え、特別仕様の寝具の維持費で結構もって行かれるので儲けは通常の宿屋と変わりは無い。正直な所、ちょっぴりこっちの方が苦しかったりする。
「う～、でも不公平だよ～。だって、『ラント商会』みたいに一割貰って利益が増えるとこだってあるじゃんっ」
　ちなみに『ラント商会』とはリイダの実家の道具屋の事である。リイダ＝ラント。それが彼の正式な名前だ。それはともかくも、必死に食い下がるエリス。しかし、それも僅かな間の事だった。
「でもその一割分は冒険者の給金としてもって行かれるんですから、儲けは通常のままですわよ」
　「あ」と目を点にするエリスと、「頭悪いですわねぇ」とまたまた辛辣に対処するルカ。　ふう、と一息吐くとエリスの肩に手を添えながらルカは話す。
「とにかく、社会の流れは素直に受け止めるべきなのですわ。それが神が賜られた試練なのだと」
　やっとこさ、出てきたシスターらしい発言も、素直に受け取れない。それが、ルカの性格を知っているが故なのか、自分の受け取り

方が捻くれているのか、それは定かではない。どちらにしろエリスに与えられた選択は「諦めろ」らしい事だけは明らかのようである。
「……結局、私のワガママなのかな～。う～、納得行かないっ！」
「大丈夫ですよ、そのうち良いことあります」
「……そんな、無責任な」
「完全に責任ある発言なんて誰にも出来はしませんわ。さ、とりあえずここから出ません事？　太陽の光が届かない場所は息苦しくて」
言いながら、ぶつぶつ呟くエリスを礼拝堂へと引っ張っていくルカ。
誰もいないはずのそこで二人を待っていたのは木箱と金庫を両脇に置きながら長いすに腰掛けているリイダだった。
「やっぱり良い事なんてないじゃないの～」
「何言ってるんですの。品物を注文をしたからにはお金を払う。世の常識ですわよ」
「そうだよ。それじゃ、僕が悪人みたいじゃないか。それにね、エリス」
傍らにある持ち運び出来る金庫をバンバン叩きながら、リイダは呆れ顔を露にする。
「税金云々にこだわってる割には随分お金の管理がずさんだよね」
自分の家の全財産が入っている金庫をみながら、エリスは沈黙するだけだ。
静かにリイダの元に歩み寄り、「いくらだっけ？」と呟く。
「９６８０リーク」
また、リイダも必要最低限の言葉だけを言い放つ。お金を取り出そうと金庫を開けようとした時、エリスはある事実に気がついた。
「リイダゴメン……。鍵、ウチだ、取ってくる」
即座にその場を後にしようとするエリスの腕をリイダは引く。
「それじゃ二度手間になるでしょ。一緒に行くって、何慌ててんの」
「ああ～、そうだよねぇ」
「全く困ったもんだなあ。本当に冒険者の事になると見境なくなる

んだから、エリスは。親父さんも泣くぞ」
　リイダとしては、ふっと出てきた言葉だった。別に意図は何もなかった。ただ、それは言うべきではなかった事だと知っているルカは無言でリイダの腕を自分のそれで小突いた。リイダ自身も自分の失言に気づいたが後の祭り。目の前のエリスは自分に沈黙を携えた侮蔑の表情を見せていた。
　三人の間に、得も言われぬ沈黙が流れる。それを破ったのは、彼らの中心に何時の間にか現れた小さなモノだった。
　それは、見たことも無い不思議な生き物だった。外見上は猫に似ていた。両の掌に収まってしまう位の小さな小さな子猫。限りなく白に近い淡い桃色の毛のその猫に似た生き物。何が猫と違うかと言えば、尻尾は短くて丸くウサギのよう。そして、三人が気まずかった雰囲気を取っ払わざるを得なくなった位の、一番の相違点はその背中に翼が生えていた事だった。二対、合計四枚の綺麗な純白の翼。はためかせ、3人の中央を飛んでいる。しかも、音も無しに突然現れて。
「コレ……何？」
　とエリスが指差しながら呟き。
「さあ……新手のモンスターでしょうか。それにしては可愛らしいですけど」
　とあくまで呑気な口調ながら、その生き物に見とれているルカ。
　そして、ひたすら口をぽっかりあけて、間抜け面なリイダ。
「チェカル！」
　礼拝堂の扉を勢い良く開けると同時に第三者の声が室内に反響する。
　またそれと同時に例の生き物は可愛らしい鳴き声を上げ、扉の前の人物へむかって一直線に飛んでいった。
「ぼくの為に教会を探してくれていたのかい？　でも、急に姿を消すから心配したよ」
　まだ声変わりもしていないであろう声で話すその少年が声を掛け

ると、件の生き物は少年の周りをせわしなく飛び回る。その光景をぼうっとみている三人。否、エリスだけは苦い表情。その少年のマントを留めているブローチは、紛れも無い冒険者証だったからだ。
やがてチェカル、と呼ばれたその生き物は少年の肩に身を預けた。三人の元に歩み寄る少年。
「ええと、こんにちは。こちらの責任者にお会いしたいのですが」
言った少年は中々に綺麗な顔だちをしていた。美麗という派手さではなく、人当たりのよさそうな穏やかな少年。年の所は同じ位だろうか。
「……間に合ってマスっ！」
「何勝手な事いってますの？！　……おほほ、気になさらないで下さいましね。司祭は所用で出ておりまして、戻るのは明日ですの。どのようなご用件でいらっしゃいますかしら？　お話だけでも」
少し間があった後、少年は話し出した。
「僕の体に掛けられた呪いを解いて頂きたいのですが」

3

「呪い……ですの？」
「はい、シスター」
首を傾げながら尋ねるルカに少年は真剣な眼差しで応対する。うーんと言いながら、少年の周りをぐるりと一周し、外見を確かめている。
「外見は、何ら変わった点は見受けられないようですけど……どのような呪いですの？」
言うと、少年は冒険者証を差し出した。身分証明も兼ねたそれをルカは確認する。
「えっと、お名前はフレオ＝ファランさん。魔道剣士……まあ、魔法も剣もおできになるんですの？」
「……ええ、剣は護身程度ですけどね」
目をキラキラさせながら、営業用の応対をしているルカ。他の二人はすっかり蚊帳の外である。
「あのさ、リィダ。私達……帰っていいのかな」
「いいんじゃないのかな。というか帰ることをおススメ。こっちは、早く貰うもの貰わなきゃならないし？」
「ああ、そうか。鍵っ！」
手を打ち鳴らし、うんうん頷くエリスと、ジト目でみているリイダ。
「……忘れてたね？」
「い……嫌ぁね～。忘れてなんかいないわよっ！　……ぼうっとして記憶がほんのちょと飛んだだけじゃないっ！」
「それを忘れてたっていうんだよ」
ふぅ、と呆れ溜息を付きながら、リィダは少し反省もしていた。ふと、口から漏らしてしまった失言を。エリスの前では、父親の話は禁じ手。良く、解っていた筈なのだけど。

「ほらほら、早く戻るわよっ」
そんなリィダの思いを他所に、エリスは出口へと向かう。…手ぶらで。
「おいこら、金庫っ！」

＊　　＊　　＊

村の象徴とも言える、中央広場にでんと根を這わせる大木の頂点に二つの影があった。一つは腕組みしながらふんぞり返らせ、その頭の上に小さな二つ目の影。
眼下に映るのはのどかな村の光景。一つ目の影がふんと鼻を鳴らす。
「……なんつーか……。嫌気がさすくれえ邪気のねぇ村だな、おい。ま、あの純な坊ちゃん冒険者にゃあお似合いだけどよ」
肩にかかる黒髪は洗いざらし。目に掛かりそうになるそれを鬱陶しそうに払う。同時に頭頂に鈍い痛み。
「おいこら！　人の頭の上でぴょんぴょん跳ねんじゃねえ！」
どなりつけると頭の上にいた影、がふうわりと目の前に舞い降りてきた。一対の黒い翼を背に、ふよふよと宙に浮いている人物（無論人ではないが）は堰を切ったかのように話し出した。
「にゃー。ごめんですぅー。つい気が高ぶっちゃってえー」
「あー、そのバッサバッサしてる翼も目障りだっ！」
「無茶言わないで下さあい。こうしてなきゃ落ちちゃうんだから。それともナニですか？　イーダはサシィが落下して、地面に叩きつけられて血にまみれて、ただの肉塊に成り果てた上で天国の住人になっちゃってもいいと考えますですか？　あああ、サシィはこんなにもイーダに尽くしているのにぃー。薄幸のサシィ……幸せが訪れるのはいつ？　いつなのぉ？！」
「……本当にフレオの奴はここにいるんだろうな？　サシィ」
サシィの独白を聞き流し、話を切り出すイーダ。しかし、そこは

問屋が卸さない、というのがイーダの使い魔であるサシィの性分だった。主人に絶対服従が基本のはずな使い魔として、かなり希少な存在である。
「話そらしたあっ！　だからイーダは女の子にもてないんだよっ！」
「いーから、質問に答えやがれっ！」
足を踏み鳴らしたせいで、青々とした葉がバサバサ落ちる。しかし木の上にいる2人にとってはどうでもいい事だった。
しばらくぶつぶつと文句を言ったサシィだったが、やがて話を切り出した。
「まあかせて下さいっ。サシィのレーダーは百発百中なのです！」
褒めて褒めてといわんばかりの潤んだ瞳に、イーダは怪訝そうである。
「……で？　具体的にはどこだ？」
本当なら嫌味の一言でもいってやりたい所を、何とか押し殺す。無駄な問答を続けている暇はない。本音を言えば、主人であるはずの自分が使い魔に押されているという図式が我慢ならなくなっている。日常茶飯事となりつつあるとは言え、それに慣れてしまうのは不本意だからだ。それを知ってか知らずか。サシィは一瞬、ん？と首を傾げて、すぐに答えを返した。
「えっとね、あそこ？」
指差した方向を見たイーダの表情が、曇った。
白で塗装された外観、屋根の上に十字架が備え付けられた建物といえば。
「きょ……教会……」
聖なる空気に満ちているその空間は、魔族にとっては居心地の宜しくない場所である。消滅、なんてことは無いが多少力が制御されてしまう危険を背負わされる。
「出てくるの待ってた方が良い、よね？」
冷や汗が出てきそうな感情を抑えて、イーダは再び偉そうな表情を見せた。

「いいや、強行突破だ」
「えー、サシィ気持ち悪くなるのヤダー」
「……てめえは、俺の使い魔だという自覚、あるか？」
「あるよぉ～。だから、どんなに酷い仕打ちを受けようとも、一度もイーダの側を離れたことなんかないじゃん」
「……あ、そ」
諦めて、教会の方向を向く。また、無駄な問答をするところだった。危ない、危ない。
「なに、短時間でおわらせちまえば何の支障もないだろ。……俺の力を見くびってもらっちゃあこまるぜ？」
「しょーがないなあ、ま、いっか。サシィもう限界」
サシィを横目に、またふふんと意味ありげな表情を浮かべるイーダ。眼下で自分達を見つめている親子らしき人間達が目に映った。
「ほら見ろよ。人間達も俺たちの存在に恐れをなしているに違いないぜ？」
「えーと……何か指差されている気がしますぅ」
サシィの呟きを無視して、また彼は目標を見つめた。

＊　＊　＊

「おかーさん、あの人達何やってるのー」
「しっ、見ちゃいけません」
異形の魔物とは比べ物にならない程の魔力を誇る、人型魔族も知識の乏しい一般人にしてみれば、見た目は只の人。故に、彼らは『木の上のアヤシイ人物』として、村人の目には映っていた。無論頂上の魔族は知る由もない。

＊　＊　＊

目をキラキラと輝かせながら、身分証明を進めていたルカは、あ

る記載を目にした途端、きょとんとした表情になった。少年、フレオと証明書を何度も繰り返し、確認している。目に映る、フレオはその一部始終を眺めながら苦笑いしている。

「……え……」

思わず、そういわずには居られない事実がそこにはあった。

（長いこと、シスターとして仕事をしている訳ではないけれど、こんなケースは初めてですわね。むしろ、司祭様……いや大僧正様ですら、手のつけようがないのではないのかしら）

とにかく、自分では対応できないのは明らかだった。

「あの……やはり、無理なのでしょうか。シスター」

訴える表情がどこか切なげに見えて、思わずどきりとした。

（いいい、いけませんわっ。私は神に仕える身なのですからっ！）

親友二人に聞かれたら、呆れられる台詞を心で呟いて一人盛り上がるルカ。

お洒落と肉を切に求め、金勘定には目ざとい彼女である。神のご加護なんて受けなくても、逞しく生きて行けるに違いない。と親友達は思っている。というか、絶対そうだと確信して疑わない。

「ごめんなさい、ぼうっとして。ええと、ですね」

司祭が戻ってくるまで何とも言えませんわ。ルカが言おうとした台詞は、言葉にする前に遮られた。

＊　　＊　　＊

「チチィッ！！！」

激しい、耳鳴りがしそうな音が礼拝堂を駆け巡る。全員がそのけたたましさに思わず耳を塞いだ。退室しようとしたエリスとリィダの二人も。足下には、金庫が横倒しになっている。

「……？　どうしたんだ、チェカル？」

表情を歪めながら、フレオが宙にいる件の生物に尋ねている。あの可愛らしい、小さな体からこんな鳴き声が漏れるなど誰が想像で

きるだろうか。否、これは漏れるなどという規模ではない。爆発とかいった方が余程しっくりくる。こっちの気は全くお構い無しに、チェカルは泣き叫ぶ。不揃いの調子で、何度も何度も。
「……逃げろって、言いたいのか？」
そう、フレオが告げた時、激しい叫びはピタリと止まり、直後「チィッ！」とひと言だけ、泣き声を上げた。やっと一同は顔を上げる。まだ、耳鳴りが止まない。
「そんな事言われたってそんな鳴き声あげられちゃ、身動きできないよ……」
涙目になりそうなエリスは、よろよろと扉を明けに行く。それを支えるべくリィダが続いて、取っ手に手を掛けようとした触れる前にそれは動いた。
直後、勢い良く開けられたそれによって、エリス、ではなく後ろのリイダが激しく尻餅をつくハメになった。エリスの重力も加わっての衝撃はかなりのものだった。

＊　＊　＊

エリスとリィダ感覚で曰く、全身黒ずくめだけど、何かど派手な衣装を着たオニイサンはとっても怪しかった。腕なんか組んで偉そうだし、ニヤニヤ笑っててていけ好かないし。何か、背中に黒い翼とか着けてるし。でも、肩の辺りにいる小人さんは何なんだろう。
神聖術に長けているルカには彼が、人外なるものだとは解った。だが、どう対応すれば解らなかった。とりあえず、何か思わしくない状況だという事は解る。冒険者が確かに必要だという事も。
「よお」
「やっほー、フレオっ！」
どこか得体の知れない男の声と、能天気な小人の声は不釣合いだった。調子が崩される。　毅然な態度で、フレオは二人に返答する。
「何しに来たんだ。魔王」

そんな書物と噂でしか知らない存在を出されても、庶民の三人が順応出来るはずも無かった。

4

それは誰もが、必ず聞かされる言葉。
『言う事を聞かない悪い子は、怖い魔王様に食べられてしまうよ』
魔王様は人も街も見下ろせるくらいの背の高さ。頭には、二本の鋭い角を持ち、口元から覗くのはこれまた鋭い牙を持つ恐ろしい存在であるという。
大抵の子供は震え上がり、「まおうサマ、もう悪い事しないから、僕の事食べないで」と泣きながら許しを請うのだ。世界では、普通にお目にかかれる、しつけの一場面である。

＊　＊　＊

さて、時は数年前の事。タフな三人組も、いたいけな可愛らしい幼子だった頃の話。
「まったく、これで何回窓ガラスを割ったと思っているのです？エリス」
前言撤回。そのままの子供だった、否、今よりやんちゃで手の付けられなかった頃の話。読み書きを習うための教会学校での出来事。
「えーと、……ごめんなさい」
とりあえず、頭を下げて素直に謝っておく。言い訳をすると、怒られることは過去のお叱りで身に染みている。今も、言い訳したい気持ちを必死に抑えて反省している「フリ」をしている。長々とお説教をくらうのは、足が疲れるから面倒だ。しかも温厚なシスターの話は淡々と、順をおって丁寧なものだから余計に。これならガミガミと、お母さんに怒られた方がまだ楽というもの。椅子で座ってゆっくりされるならまだいいんだけど。果汁とお菓子がつけばなお良し。
「確か、五回目だよね。エリス」

淡々とした口調で、一緒にいたリイダが応える。余計な事を、と内心でエリスはリイダを罵った。
「回数は問題じゃありません。何回も割るのが問題なのです」
「落ち着いてくださいまし。エリスも大いに反省しております。五回目があっても、六回目があるかは神のみが知る事」
敬語は幼少期からの筋金入り。まだ、シスターの頭巾は被っていない。
「神がお許しになっても、魔王様はお見逃しになりませんよ」
それが、三人が始めて「魔王様」的、教育指導を受けた瞬間だった。とつとつと、魔王様の恐ろしさを説明するシスター。うんうんと頷きながら黙ってしまった子供達。効果ありかと感じたシスターの手ごたえは、しかしただの勘違いに終わった。
「確かに凄く、怖そうだけど……シスターは魔王様にあった事あるの？」
「……え？」
突然のエリスの質問に、顔が引きつりそうになるのを必死で堪えるシスター。神に仕える、聖なる乙女は何事にも心を揺さぶられてはならないのだ。
「魔物はありますが……魔王様はまだ会った事はないですね……」
「えー、じゃあ。何で角が生えているとか解るの？　勝手にきめちゃ魔王様かわいそう」　と、エリスが真剣そのものの表情で詰め寄れば。
「そんな理由で説教の引き合いにされちゃったら、たまったもんじゃないよね」
子供らしからぬ思考で、傍らのリイダがやれやれと溜息を吐き。
「大丈夫ですよ。魔王様も私の術と、可愛さで「いちころ」ですから」
これまた、年齢不相応の言動で頬を何故か、赤らめているルカ。
温厚な、シスターにも限界がある。堪忍袋の緒が切れかけたが、なんとか押さえる。それが神の元での修行の賜物なのであるかは、

神のみぞ知る。かどうかは解らない。だって、神様も会った事がない筈だから。
「と、とにかく。魔物を送ってくるのですから、怖い者なのは確かです。後で怖い思いをしても知りませんよ」
「じゃあ、賭ける？　シスター」
「……え」
「魔王様が怖いか。そうじゃないか」
年端も行かぬ子供が賭け事とか口にする事自体が問題なのであるが、その判断がつかぬほど、実際の所、シスターは動揺していた。伝説に近い魔王が突如我々の前に現れることもあるまい。それに、幼い子供が言ったことだ。今目の前にいるのが、ただの「幼い子供」ではないことも忘れ。
「いいですよ。それで、何を賭けましょうか？」
にっこりと、慈愛の笑みで応えてしまったシスターの運命は、神にもどうする事も出来ず。
「それじゃあね。シスター…」
純粋無垢な子供の瞳。秘めているのは、純粋故のとてつもない世界。まだまだ修行が足りない。とシスターが痛感するのは、直後の話。ちなみに、数年後にひとりは魔王に嫌悪を抱くことになるのだけど。

＊　＊　＊

時は経て、現在。駄々をこねる程子供ではなくなり。しかし、世を知るまでには、まだ大人にはなっておらず。それでも、幼少時に比べれば沢山の知識を経て、彼らも品行改まった人間に成長した……訳は全くなかった。生来の性格は根強いものなのである。
「よぉ、フレオ。相変わらず可愛げのない坊やだな、お前は。もうちょっと愛想良く笑えよ」
「お前が、それを言うのか。魔王」

「おーおー、そうやって睨む姿も可愛らしくてサマにならねーな」
チッと、舌打ちするフレオに、連動するかのように、チェカルが今度は抑え目な鳴き声をあげている。
確かに、華麗な美少年には似つかわしくない表情だなと、三人は思っていた。否、ルカはして欲しくありませんわっ！　と切実に願っており。エリスの表情は、呆然としながらもどこか怪訝な様子だったが。
「なー、いい加減仲良くしようぜ？　別に命取ろうって俺はいってないだろ？後、他人行儀に魔王って呼ぶのもやめねえ？」
「それは嫌だね、愛称で呼ぶのも。増してや、本当の名で呼ぶのも面倒だ」
「はっ！　本当に可愛げのない、坊ちゃんだぜ。本当調教のし甲斐があるよなあ」
意味深な言葉は流すに限ると決め込んだ、庶民三人の姿を『魔王（三人の中では仮）』の目が捕らえた。黙って突っ立っている三人をみて、ニヤニヤとした笑い顔を見せる。
（妖しいなあー）
＜　（好感度めちゃめちゃ悪いですわね）
（帰れ）
三人がこんな思考をめぐらせているのも知らず、意気揚々と『魔王（仮）』イーダは話し出す。
＜　「よお、愚民ども。どうやら、この俺様の力に圧倒されているようだな」
ははん、と鼻で笑い、腕与している姿を見ても、黙ったままの三人を見て、怪訝な表情を見せるイーダ。どうにも、読めない人間は相手をしていて面白くない。そう、自分を睨んでいるフレオのように解りやすくなければ。
「おいこら、愚民ども。黙ってないで、何か言ったらどうなんだコラ」
「さっきから愚民、愚民と失礼な。私には、ちゃんとルカ＝タマル

と言う名前がありましてよ」
「同じく。愚民じゃなくてリイダ＝ラントだ」
「私は、エリス＝ターシェンよ」
「あー、俺はイー……って誰が自己紹介をしろと言った！」
「ちなみに、私はサシィですぅ」
「てめえは黙ってろ！　サシィ！」
「えーん、ひどいですぅー」
泣き真似しているサシィを放って置いて、イーダは言葉を続ける。
「あのな、魔王が目の前に現れてるんだぜ？　何も感じねえのかよ」
「何か、意地張っているようにしかみえませんよぉ、ほらイーダって威厳とかないからー」
サシィのそんな一言は敢えて無視するイーダ。ほんのちょっとの沈黙を経て、やっとの事で三人は話し出す。
「いや、ただ黒い羽しょったお兄さんにしか見えないんだけど……」
背丈はリイダより高めな位だし、角も牙も生えてないし。顔つきも余り普通の人間と変わりないし。
（よくよくみれば、結構悪くない顔しているかも知れない……）

そう、思ったのをエリスは即座に打ち消した。何、私までルカに感化されようとしているのよ。そう、強く言い聞かせて。増してや、コイツは魔王。いや、それは本当かどうか解らないけど。でも、もし本当だったら。こいつが、本物の『魔王様』だったら？
「……は、これでも黙っていられるかな？」
にやりと、イーダが笑んだ瞬間。背後でけたたましく、何かが弾ける音がした。全員が振り向いたそこには、礼拝堂の固い石で作られた神の像が粉々に砕け散っている様。
沈黙した一同を見て、大変嬉しそうな表情を見せる、イーダ。
「はっ、どうだ貴様ら！　これ以上俺様をなめやがったら同じ目に……あだっ！」
もんどりうって尻餅をつくイーダ。押さえた肩が赤く腫れ、ぷす

ぷすと煙が上がっている。「神を冒涜する行為、許しませんわよ！」
怒り心頭で叫ぶルカが抱えているのは、どこから、と言うよりもいつの間に出されたのか大型の水鉄砲。「ふっふっふ。どうです？　当協会特製の聖水入り超強力噴射機能付き、魔物撃退水鉄砲の威力は」
水鉄砲。と言うか聖水鉄砲？　どちらでも良いが、基本的に殺生を好まないはずの教会に水鉄砲とは言えども武器は似つかわしくない。心の中でエリスとリイダは思っていたが、声には出さない。面倒だから。
「ふ、わー。危なかったですー」
「コラ、サシィ！　お前主人をほっといて逃げるたあ、どういう魂胆だ！」
「構うヒマなかったもん。あの程度の量だったらイーダは火傷で済むけど、サシィは無事じゃすまないよ。それともナニですか？　イーダはサシィが聖水の海の藻屑になって、顔がただれて可愛い生前の姿なんて跡形も残らない状態で、哀しくき天国の住人になっても良いと考えますですか？　あー、サシィはやっぱり薄幸なんだ。明日どころか、今日の運命すら保障されないんだ！」
「同じネタは日に一回で十分だ！　おい、そこのシスター！てめえこの俺様に向かって」
「お黙りなさい！　貴方の世界で貴方がどれだけの地位にあるかは定かではありませんけど。この世界では貴方は異邦人ですのよ。不法侵入した上に、器物破損していい理由なんかどこにもありませんわ！　それとも……何か私を納得させる言い訳でもおありですの？
『魔王』様？」
けっして、激しい形相になっていた訳ではない。むしろ、浮かべるのは無表情に近い。　しかし、そこから放出される雰囲気はどことなく他を圧倒するもの。……と少なくともイーダとサシィ、並びに途中から蚊帳の外になっているフレオには感じられた。
エリスとリイダは、筋の通った言い分の親友の姿を珍しく眺めて

いた。やっぱり、人を正しき道に導くシスターの基本は根付いているのだなあと感心すらしつつあった。
「ああ、これ一体で何ヶ月分のお肉になる事か……いいえ……何年分…」
悲しげな表情でぼそりと呟いたこの一言さえなければもっと良かったのだが。「やれやれ……あの発言は神への冒涜にならないんだろうかね、エリス」
腕与しながら呆れた表情で呟くリィダに相手の返事は届かなかった。いつのまにか無表情になっているエリスに気付いたときには、その姿は自分の側から離れ、イーダの元に向かっていた。
「……エリス？」
呟きながらも、リィダは彼女を止めようとはしなかった。彼女の「事情」を知っていたから。床に突っ伏して嘆いたルカもいつのまにやら黙ってエリスの行動を見つめている。エリスとイーダ、二人の視線がぴったりと合った。
「何だ？　愚民」
「エリスよ。ねえ、あなたは本当に魔王様なの？」
「……？　何だ、てめえ。本物だったら、どうしようってんだ？」
「つまりは…この世界がモンスターのせいで迷惑被ってんのもあんたのせいって事よね？」
しばし沈黙があった後、鼻で笑いながらイーダが応える。その態度を示された時点で、エリスの中で何かがキレた事に、目の前の魔族が気付くことはなく。
「お、いっちょ前に抵抗かよ？　……そうだって言ったら……どうするんだ愚民」
「エリスよ、ダサ魔族。そんな愚民愚民言うなら、とっとと消せばいいでしょーが、大きな口ばっか叩くだけで何もしてないくせに」
「だ……ダサ……」
「うわー…、確かにイーダのセンスはサシィもどうかと思いますけど、だれもつっこまなかったのに」

現にお前が突っ込んでるじゃないか、と誰もが突っ込みたい場面であったが、場の雰囲気がそうさせなかった。
「は、だったら痛い目にあわせてやろーじゃねえか」
「よせ！　魔王！　彼女達は何の関係もない！」
今まで蚊帳の外で呆然となりかけていたフレオが、大急ぎで二人の元に駆け寄る。エリスの肩を持って、離れるように促す。それが、彼女の逆鱗にふれるとも知らず。
「と……とにかくここは僕にまかせて下がってるんだ、エリスさん」
一冒険者としては、当然の処置もこの場では通じなかった。
「偉そうな事言うな！　気軽に名前も呼ぶんじゃない！　商売敵が！」
「……え」
きょとんとした表情、肩で鳴いていたチェカルまでもが怯えて隠れてしまう始末。
肩からちょっとだけ顔を覗かせて、ぷるぷる震える姿を可愛そうと思う余裕はエリスにはない。
「だったら、この場に来た時点でばっさりヤッてしまえ！　そうすれば、モンスターも現れない、平和が訪れて万々歳じゃないの！　あのダサ魔族が屁理屈いっている間にそんなヒマ山程あったじゃないか！　ああ、そりゃ元締めたおしちゃったら商売上がったりだもんね！」
「あー、キレちゃったよ」
「ま……あれじゃ無理もないですわね」
とりあえず、しばらく親友の動向を見守ることに決めたリィダとルカだった。触らぬエリスにたたりなし。二人とも自分の身が一番大事だった。
「お前もお前だ！　もっとこっちが震え上がる程のヤツだったら、私だった諦めて降伏したわよ。なのに、魔族がこんなふざけたヤツだったなんて……。死んだ親父も浮かばれないっつーの！」
異議を唱えようと、していたフレオの表情が変わった。きっと、

彼女には冒険者や魔族に対する深い恨みや悲しみがあるのだと、この台詞を聞いた者はだれもが予想するだろう。そしてそれをひた隠し、明るくふるまっている健気な少女の姿を連想する事だろう。普通、だったら。

「お前らのせいなんだから、責任取りやがれ！　うちの借金地獄！」

今まで相手にしてきたモンスターよりも、厄介かも。……と思った事を無論フレオが口にする事はなかった。

5

『ターシェン』は特別なウリがある宿屋ではなかった。舌鼓を打つという程ではないけど、暖かい美味しい料理。高級な羽毛を使用している都の宿屋に比べれば、各段に安いお手ごろ価格の布団。本当に、どこにでもあるような普通の宿屋。都からは凄い離れた僻地の村だから、利用客は決して多くは無かった。即ち、儲かってはいなかったけれど、大きな無駄遣いをしない限りは普通に生活できる位の経済状況は保たれていた。

そう、我が家には何の問題もなかったはずなんだ。馬鹿親父の、あの一言さえなければ。私は、最初から無茶な考えだと思っていたんだ。

「突然だが、ウチは冒険者の宿にしようと思う」

意気揚々と、朝食の席で得意気に話す、父親の言葉は、本当に突然で且つ唐突だった。加えて、理解不能。やれやれと、エリス（十歳）は溜息つきながら、軽蔑の眼差しを浮かべている。反して隣の母親は、困惑の表情を露に、動揺しまくっていた。

「必要性が全く見出せない」

反対され、明らかに不機嫌そうな父。即ち自分の意見を疑わず、後先も何も考えていないという事。全くもってとんでもない話だ。

「何がだ、エリス」

「一つ。この辺りは魔物が出る場所じゃないから、冒険者は大した被害も受けない。よって普通の宿屋でも十分に休息が可能」

「強い魔物が全く出ない、という保障も無いだろう？　それに別に魔物と戦わなくても大幅に体力を消耗する事だってある」

「一つ。ここは経験値稼ぎも出来ない田舎で、只でさえ冒険者が来ないのに、専門設備にする必要性が不明」

「いや、冒険者専用にするつもりはないぞ。ただ設備をそういう仕様にするだけだ」

飽くまで意見を押し切ろうとする父に対し、机を叩きつけながら立ち上がるエリス。朝食が飛び上がって目玉焼きの黄身部分が、ひっくりかえって見えなくなった。食べられなくなった訳じゃないからそれは別に問題はない。大いに問題ありなのは、父の主張だ。

「だからそういう仕様にする意味が解らないっつってんの！　そこまで言うんだったらちゃーんとした私たちを納得させるような理由を提示できるんでしょうね？」

「ああ、あるとも。エリス、まさか父さんが何の考えもなしにこんな事を言うとでも思っていたのか？」

「うん」

娘の即答に不服ながらも、思い当る節のある父は初めて沈黙を生んだ。法に触れない限り、前科と呼ぶのは相応しくはないものの、それに限りなく値する過去の所業がこの父にはある。無論、一度や二度の話ではない。そしてその全てが思いつきで且つ考えなしな行為ばかり。口に出すどころか、想像すらもはらわた煮えくり返る事ばかりなので敢えて具体例を挙げたりはしない。まあ、例えてみるならば。

「これ以上、魔物に邪魔されるのが嫌だから、ちょっくら魔王倒して来るよ」

と、何の装備も無しに旅立つ、という感じだろうか。極端すぎるかも知れないが、どうかそれで勘弁して欲しい。

とにかくも、そんな父が珍しくも理由あって何かを提案するという、稀……否、初の事態にさしものエリスも耳を傾けてみようとこの時ばかりは思った。

「お前はさっき冒険者が少ないから、意義がないと言ったな。しかしだな、その少ない冒険者の存在によって、私達の安全が保証されているのも確かだ。そうだろう？　幾ら優遇だなんだのともてはやしてはいても、この村人の冒険者への認識は薄い。それは改善されるべきだ、そう思ったんだ！」

熱弁に母が目を輝かせている。普段が普段だけに、父の姿がより

しっかりした存在に見えているのだろう。確かにそれに値する立派な意見だとはエリスも思った。その意見だけならば、の話であるが。どうだといわんばかりの自信に満ち溢れた表情を浮かべる父に、しかし娘は冷静だった。

「その意見は立派だと思うよ」

「そうだろう、そうだろう」

「で、どの辺がウチの運営形態を変える事と繋がるのよ」

「……え、」

自信に満ち溢れた表情に、冷や汗がたらり。

「それだったらさ、ビラでも作るなり、掲示板で主張するなり、集会開くなりして考え述べればいい話でしょ。ちょっと、お母さんも騙されない！」

「そんなっ、せっかくお父さんが珍しく立派な事を言っているのにっ」

「財政が掛かってんのよ！　失敗する率の方が絶対でかいに決まってんのに、立派も何もないでしょーにっ！」

この両親の反面教師の結果として、現実主義の娘あり。齢十にして、夢は妄想でしかないと結論付けている少女は世界広しと言えど、滅多にいないだろう。

「さっきから聞いてれば、なんだ頭ごなしに反対しているだけで、父さんの立派な志は無視か！」

「人の話無視してんのはそっちでしょーがっ！　こっちの方がよっぽど納得できる理由を提示してるじゃん！　わかんないか？　この馬鹿親父！」

「親に向かって馬鹿とは何だ、馬鹿とは」

「馬鹿に向かって、馬鹿って言って何が悪いのよ。第一親面するなら尊敬に値する事一つくらいしたらどうなのさ。ばーか、ばーか」

「何だとー！　助けてもらった冒険者に恩を返したいと思う心は尊敬には……」

父はしまったとばかりに口を塞いだ。対するエリスは、したり顔。

「何だ、やっぱ個人的理由の思いつきなんじゃん。立派な考え提示して丸め込もうと思っても私には通じないわよ？　ああでも、恩返ししたいって気持ちは立派だと思うよ。それに免じて、バッカな戯言は不問に伏してあげるから。その気持ちを心に、今まで通りの営業を」
「いや、そう言うわけにはいかない」
自己完結させようとする娘に父はまったをかける。
「どういう事よ」
「ふっ、甘いなエリス。父さんが、お前の反対を見越していなかったとでも思っていたのか」
にやにやと今度は父がしたり顔、一抹の不安が過ぎる。
「……何、企んでるの」
「すでに、先手は打っておいた」
馬鹿だ、いや底なしの大馬鹿野郎だ。聞く前から結果が見えているのが、情けなくてたまらない。
「もう寝具一式は業者と契約を結んだからな！」
「こんの、ボケ――――――――――――――――っ！」
呆れてものも言えない心境ではあったが、ここは口を閉ざすわけには行かなかった。
「五代続いた『ターシェン』を一瞬にして消し去る気か！」
「やってもみないで好き勝手言うな。後で泣きっ面みせても父さんはそしらぬ顔するからな！　はっはっは」
馬鹿じゃ足らん。もう救いようのないアホだ。笑ってる場合か、コラ。母は、冷め切った紅茶を啜りながら我関せずを決め込んでいる。しかし根性で生きている娘をなめてくれるな、そうは問屋が卸しはしない。
「業者の連絡先！　私が断って来てあげる」
「それはダメ、契約者は父さんだし、十五歳未満のお前に契約資格はない」
うぐ、と口を噤む。こんな時だけ、法なんか持ち出して。最悪だ。

「成功すれば暮らしも豊かになる。お父さんに任せておきなさい」
最早言うことは無い。心の中には、ただ怒りが残るだけ。
「この馬鹿親父。馬に蹴られて死ね！」
初代から数えて百余年。（一応）老舗の村の宿屋『ターシェン』の悲劇の運命は始まったのである。

＊　＊　＊

それで冒険者に恨みを持つのはわからないでもなかったが、要は度の過ぎまくった親子ゲンカじゃないのか。と、ルカとリイダを除く一同は思っていたのだが、誰も口にする事はなかった。否、例外が一人。
「それって、只の親子ゲンカに冒険者を巻き込んだだけじゃねえのか」
「むぅ。イーダの無神経ー。火に油になるから誰も突っ込まないんじゃん」
「黙れ、馬鹿魔族共が」
エリスのやたらドスの聞いた声にうっかりと畏怖の念を感じてしまうイーダ。ルカに続き、本日二回目の不覚に思わず苦笑する。
「ショックー。イーダと一緒くたにされたー」
「それは俺の台詞だ」
何なんだ、このガキどもは。と考え込むイーダをさらりと無視し、話を続けようとするエリスは何故か押し黙った。今まで、淀みなく話を続けていたから、目の前で話を聞いていたフレオは呆気に取られる。
「……エリスさん？」
「…そしたらさ」
「はい」
「あの馬鹿親父、本当に馬に蹴られて死にやがった……」
一気に、沈黙が走った。ウソの様な、でもエリスにとっては事実。

「残ったのは、多額の借金だけ……」
「えーと、でも契約者が死亡したら自動的に契約は一旦切れるはずだし、更新しなければ返却も可能なはずで」
苦し紛れに口から出た言葉が、今となっては何の慰めにもならないとフレオが気付いたのは、エリスの睨みつける視線に気付いた時だった。
「あ、ごめんなさいっ、無神経な事言いました」
「んなこたーわーってるわよ。即、契約破棄の手続きを母さん通して取ろうとしたわよ。そしたら、業者が悪徳でとんずらしやがって、代わりに来たのが借金取り……」
契約期間は約五年。もうそれからは切り詰めの連続だった。五年の契約料に加え、いやらしいことに特別仕様の寝具の維持費は別途負担。あれから数年の後に、村の周りにちょいと強いモンスターが出現するようになり、ちょっとは冒険者の需要が高まったものの、瑣末な話。
契約破棄まであと一年。でもそれで借金地獄から解放される訳ではない。残りの支払いは、見積もってもあと十年は掛かる計算。
「なのになんだって、あんたらのために税金多く払わなきゃ駄目なのよ！」
「いや、そんな事を言われても……」
「モンスター退治したって馬鹿親父の命は奪ったくせに！」
呆然としていたフレオの表情が一変、神妙なそれに変わる。同時にエリスの表情も怒りから、歪んだものに変わっていた。
「それって……どういう……」
押し黙るエリスを、一心に見つめるフレオ。それから逃げるようにエリスは視線を逸らす。
「エリスのお父様を跳ね飛ばした馬の持ち主が冒険者だったからですわ」
凛とした声で言い放ったのは、ルカ。隣のリイダが珍しく、眉間に皺を寄せている。

「折角気をつかってたってのに」
「すでに今日失言している貴方に言われても、説得力にかけますわ。それに私はエリスの代弁者になっただけですわ。それで、その方は」
「ルカ」
なおも代弁しようとするルカにエリスがまったをかけ、深呼吸し、言葉を続ける。
「打ち所が悪くて、即死状態で……経歴に傷つくことを恐れたそいつは逃げたのよ！」
何が人を守る冒険者だ。そいつは金が貰える事を、資格を剥奪されることを恐れたんだ。馬鹿だ、そんな人間を信じた父も。最期は信じた人間に裏切られる形になっちゃって。本当にこれじゃ浮かばれない。表情を歪ませても、涙を流す事無く、押し黙るだけ。失敗したあかつきにはこてんぱんに嫌味三昧してやろうと思ったのに。死んだら出来ないじゃないか、馬鹿親父。
「貴方の事情は解りました。エリスさん。……チェカル、おいで」
フレオの周りを飛び交っていたチェカルが答えるかのように可愛い鳴き声を数回上げ、肩に止まった。
「確かに財を目当てに、冒険者証を手に入れるものがいるという事実は僕達の世界でも問題になっている。外聞が悪いから表立ってはいないけどね。二、三年前から資格の取得条件が厳しくなっているのも事実です。でもあさましい考えを持っている人間は減らない。表向きでは判断できませんから」
「別に、あんたの話を聞くつもりはない」
「僕だってお願いしてそちらの話を聞いていた訳ではありません。それだったら、最初から話なんてしないでください。はっきり言って迷惑です」
「……なっ……」
さしものエリスも、言葉を失った。
「自分から跳ね除けておきながら、慰めの言葉をかけられなかったら不満ですか。一体僕にどうしろって言うんですか、借金を肩代わ

りすればいいんですか、それとも冒険者を代表して貴方に謝罪すればいいんですか。僕は貴方に害を為した覚えは無いから頼まれても願い下げですけどね、そんな事」
「……！　人の気持ちも知らないくせにで勝手な事言われたくない」
「だったら一人の心無い冒険者の所業のせいで、他の苦悩しているかも知れない冒険者も一緒くたにしちゃうのは、人の気持ちを考えた行為だって言い張るんですね。貴方は」
淡々と柔らかな声色。しかしその内容からは明白な怒りの感情が伺える。最早立場が逆転し、呆然と話を聞いているしか出来ないエリスに容赦なくフレオの言葉が突き刺さる。
「とにかく、金勘定で動いているのが冒険者だって思われたら迷惑なんです」
言いながら、フレオは懐にしまっておいた冒険者証をエリスに提示した。彼が冒険者だってことはすでに認識しているエリスは、この行為の意味が解らず首を傾げるばかり。
するとフレオはここに注目せよといわんばかりに一部分を指で小突いた。そこにあった記述を見た瞬間、思わずルカと同じく、フレオの姿を見比べてしまった。
フレオ＝ファラン。職業、魔道剣士。性別、男。年齢、
「……二十二歳？」
目の前にあるのは、どう見ても自分と同年代以上には見えない少年。
「貴方は事情を勝手に話したんだから、僕も勝手に語らせて貰いますよ？　……苦悩の日々を」

6

清廉なる気が満ちるはずの教会の中。響くのは苦悩の冒険者の独白。そして、憂鬱なる魔族の呟き。

「ねえ、イーダぁ。もう今日は諦めて『ローディス』に帰ろうよぉ。サシィちょっと教会酔いしてきちゃった」

「だったら、てめぇだけ外に出てやがれ。俺はフレオの奴を待つ」

「そんなの外で一緒に待てばいいじゃん。もう教会ヤダ」

「あのな。いい加減言い飽きたけど敢えてもう一回言うぞ？　お前は俺の使い魔なんだぞ？　いつ何時たりとも、主人の側に仕え、守り、補助する存在なんだぞ」

矢継ぎ早の言葉に、口を尖らせるサシィだったが、すぐさま反論する。

「だったらイーダは主人としての自覚あるの？」

珍しく真剣な眼差し、思わず言葉に詰まりそうになる。

「サシィはちゃんと自分の意思で行動させてもらえてる。それは嬉しい事だよ。でもね、それはちゃんとした主人に仕えられてこそ、本当に発揮できるものなんだよ。イーダにはそれがないもん。だから、サシィはワガママを言う。自由にするの」

「な……俺は魔王だぞ？　ちゃんとしてねーたぁ、どう言う事だ」

「それは、言わない。自分で気付けばぁ？」

いつになく、厳しい口調に自然と苛立ちが生まれる。動揺が露になって来る。こんな感情は初めてだった。イラつきが止まらない。

「こら、てめぇ、いい加減に！」

声を荒げたと同時に、突然猛烈な吐き気がイーダを襲った。

「ひと時の休息を与えたもう」

耳に届く静かな、しかし凛とした声と共に、体の中のものを全て出しそうになった吐き気は瞬時に治まった。同時に目に飛び込んで来たのは、落下するサシィの姿。

「え？　うわーんっ！　落ちるー」
「サシィ！」
血相を変えて、両手でその体を受け止める。腰を摩りながらも無事な姿を確認すると、その表情が和らいだ。
「人がお話をしている最中に騒がしくするのは非常識ですわよ」
ルカがいつの間にか傍らにいた。無表情のようで、静かな怒りを秘めているようにも見える表情。肉がどうとか嘆いていた敬虔らしからぬ発言をしていた姿は少なくとも感じられない。
「失礼とは思いましたが、当方特別製のその指輪で一時的に貴方の魔性を封じさせて頂きました。……それにしても貴方、本当に魔王さんですの？」
「まだ疑ってんのか！」
「だって余りにあっさり術中に嵌ってしまわれたものですから。仕掛けた私の方がビックリですわ」
「スキだらけー。スキだらけー」
「……お前がガラにもなく真剣な話しぶりになるから油断したんじゃねえか」

「えー！　サシィのせいなの？　責任転嫁！　無責任！　ヒドイー」
「ヒドイですわね。本当に」
イーダの手に収まっているサシィに笑みを送ると、可愛らしい笑みが返る。
「話がわかるぅー。シスターさんっ！」
「嬉しがるんじゃねえっての。早いとこ元に戻せ」
「あの二人の話が済むまでお待ちなさいな。気分がよろしくなっただけでも感謝して欲しい位ですわ。まったく礼儀がなっていないったら」
「あー本当だ、気持ち悪くない！」
主人と使い魔は一心同体が故に、術も連動しているのだろう。
「俺はまだ余裕だったんだがな」

「でももう少し時間が経ったら解らないでしょう？　あの方のお話はちょっとかかりそうですし。貴方はあの方に用事があるのでしょう？」
「用事って言うか……」
「魔王」を名乗る自分に臆する事も無く、むしろ上から見下ろされている空気すらイーダは感じていた。ふんぞり返った図々しい生来の性格が発揮できないくらいには気圧されていた。対するシスターはと言えば、ただにっこりと天使の様な微笑を浮かべているだけだ。
「シュミって言うか？」
にかっと笑いながら言うサシィの発言が、呆けそうになっていたイーダを我に返させた。
「シュミ……？」
「ば……こら余計な事を言うんじゃ……」
「ちょっとキミタチさ、いい加減声を潜めなよ」
囁くような声で、傍らにいたリイダが諌める。呆れたと言わんばかりに溜息を吐きながら、目を細めたりしている。
「ルカ。君もさ、止めようとして話し込んでどうするの。静かに話していたつもりでも、ここは他の建物よりも音が反響するんだからね？　しかもルカは声高いから通るし」
限りなく抑え目にしながらも正確に伝わる声。
「リイダの言うとおりですわね。それでは、お二人とも、話はまた後で」
不満に眉根を寄せながら、イーダは黙するのみだった。

＊　　＊　　＊

「エリスさん、この子を見てどう思います？」
一方的に語られるとばかり思っていただけに、意表を突かれた。内容が曖昧なのも併せて、なかなか答えが出てこない。そんなエリ

スの様子を見やり、フレオは不敵な笑みを零す。
「珍しいとか、変わっているとか……新手の魔物だとか思ったはずですよ」
ムッとしそうになるのを何とか押さえる。こんな風に人の心を勝手に想像し、決め付けるような言い方をする人間は好きじゃない。でも、変わっていると思ったのは事実だ。そう思わない人間の方が少ないに決まっている。何せ、猫に羽が生えている生物なのだ。しっくりいかない感情を抱えつつ、首を縦に振る。
「この子は、元は猫と鳥だったんです。合成獣（キメラ）なんですよ」
『キメラ』
聞き慣れない単語に首を傾げるエリスに構わず、フレオは話を続ける。
「複数の生物を掛け合わせてまったく新しい生物を生み出す技術です。都ではさして珍しい事ではなくなっています」
「そんなもん何の為に必要なの」
「それははっきりとは明かされていませんが、たぶん国家級の秘密事項なんでしょう。とりあえず今は金持ちの道楽ですね」
「うわ……悪趣味」
「でもそれが都の現実です。チェカルもそうして作られたキメラでした。僕の死んだ妹が可愛がっていた猫と小鳥で作られたね」
余りの内容の重さは、さしものエリスの口も閉ざしてしまう程の力があった。苦笑しながら、フレオは自分の過去を話しだす。
妹が死んで数ヶ月経ったある日、貴族の使者を名乗る男が現れ、猫と小鳥を譲って欲しいと言ってきた。手元に大金を携えて。両親はまだ妹の死の悲しみにくれていたが、心優しい我が子が拾ってきた動物達については厄介と思っていた。居なくなる上に、大金が入るのであれば都合の良い事この上ない。息子の制止を振り切り、取引は成立した。
「納得のいかなかった僕は……何とかその者の家を見つけ出し、取り戻そうと捕まるのを覚悟で侵入しました」

「良く、中に入れたね。凄い人の家だったら色々仕掛けてありそうなのに」
「魔術が専門ですから」
そんな当然です、なんて顔をされても。
「何とか見つけたけど、結果はご覧の通りです。泣きたいを通り越して、情けない気分になりましたね。後を頼まれたのに」
「だから、都の教会ではなくこんな田舎の教会を訪ねてこられたのですか？」
「うわ、急に入り込まないでよルカ」
「入り込んじゃダメとは言われませんでしたから。どうせお互いが勝手に話だした事で、二人だけの話ではないのですから宜しいのではありませんか」
納得できるような、屁理屈のような問いかけをしながら、ルカが目線を送ったのはエリスではなく、フレオだった。
「なぜ「だから」なんですか？」
「いえ、たとえ途中に理不尽な経過があったとは言え、盗みに入った訳ですから都のお尋ね者になってしまわれたのではないかと思いましたので。お体が小さくなった理由は解りませんけど。きっと都合がよろしくなかったのでしょう？　チェカルさんを元に戻すためにとか」
ただの想像ですけどねと相も変わらずにっこり微笑むルカを目にして、フレオは苦笑を漏らす。
「うーんと、まあ当たりなんですけどちょっと違うかな……。確かに僕が冒険者になったのは、元に戻す方法を探したかったからです。冒険者になれば色々情報も集まりますから。でも探って行くうちに戻すのは今の技術では不可能という結論に達しました。もう一つの生物になってしまったんですからね。チェイニーでもない、カールでもない、まったく新しい存在に」
『チェイニー』とか『カール』というのは、猫か小鳥、どちらかの名前なんだろう。だから、新しいこの子の名前は二匹、否一匹と

一羽の名を併せて『チェカル』か。
「とにかく気分一新、チェカルと一緒に旅を続けようと。あ、もう家出同然でしたからね。そうしたら……詳しい話は言えませんけど、こんな事になってしまいまして。色々と不都合なので、今は体を元に戻すべく地方を行脚中という訳なんです。僕の話は以上です、エリスさん」
苦労話を聞かされて心が動かされなかった訳じゃない、同情すらしたくなった。かといって、今まで自分が冒険者に抱いていたわだかまりがすぐに消える事もない。ただこうして、訳あって冒険者の道を歩んでいる者がいるのは心に留めておくべきだと解ったから。
「ん、まー。認識は改めておくわ。優遇な点はまだ納得いかないけどさ」
「あ、それを言われると辛いかも知れません。値する働きが出来るように努力しますよ。でもまあまずは、元に戻らないと話しになりませんけどね」
「そうそう、私思ったのですけど」
間に割り込むように、現れたルカに思わず飛び上がりそうになるフレオとエリス。
「だーっ！　またあ！」
「いいじゃありませんの、思いついた時に言わないと忘れちゃいますもの」
人差し指をびっと挙げて、揺ぎ無い決意と言わんばかりのルカ。全然自分は常識的な行動してないじゃんとリイダは心の中でつっこんでいたりした。後が怖いから、口には出さないけれど。触らぬルカにもたたりなし。というよりは、真面目に神の罰とか喰らいそうでコワイから、とリイダは心底思っていた。
「ずっと勝手に誤解してたんですけど、フレオさんの呪いはこちらの方がかけたのではありませんのね？」
ルカはイーダを指し示し、フレオは頷いた。魔性を消されて、ご丁寧に羽まで消えて外見上、普通の人間となんら変わらなくなって

いるイーダは、仏頂面しながら沈黙を守っている。
「犯人が解っていれば……こんなに色々回ったりはしませんし」
呪いを解く一番簡単な方法は、かけた本人に頼むことだ。とは言え、呪いをかける位悪どい人間が、あっさりと頼みに応じる事はまずありえないのが定説。
「それにしたって、都じゃなくてもいくらでも大きい街はあるのに、なんでまたこんな何もない殺風景な、旅人が中継地に使うしかない、ド田舎に」
「……エリス、一応生まれ育った村なんだからさ。……確かに、目立ったものはないけど」
エリスとリイダの会話を聞き、思わずフレオが噴出した。
「ああ、スミマセン。話を続けさせて頂きます。大都市の教会は意外とケチな方々が多くてですね。毒なら解毒薬買えばいいだろとか、こんなはした金じゃ話にならんと言う方が多いんですよ。僕も決して高給取りじゃないですから。魔物を倒したり、ギルドで仕事をこなしたりしなければ収入は無い訳ですし」
「……冒険者優遇、……なのに？」
「大都市は特殊ですよ。お抱えの傭兵団や騎士団がいますから、冒険者の需要はほぼないんです正直な話」
本当に意外な事実だった。大都市であれば、大層崇め奉られているとすら思い込んで居ただけに。思わず言葉に詰まったエリスに「そんなに考え込まないで下さい」とフレオは、微笑んだ。
「だったら秘かに隠れているかも知れない、高名な方を求めて行脚してみるのもいいかと思いましてね。幸い僕の呪いは、生命に関わる事や期限があるものではないようですし。世界も見てまわりたいと思っていたし……。勿論、早く戻りたいですけどね。ああ、そうだエリスさん」
「はい？」
冒険者に対する感情が、急激に変化しようとしているせいか、混乱状態のエリスに対し、フレオはにっこりと満面の笑みを零した。

「色々、失礼な事言って差し出がましいかも知れませんが、お部屋を一つ用意して頂けませんか？」
「へ？」
「ああ、動物は禁止ですか？」
ゆっくりと、視線を肩に止まっているチェカルに向ける。『ターシェン』は中継地という事を考慮して、厩舎も一応用意してある。
「えーと、さっきみたいな大きな泣き声がなければ大丈夫……だけど」
「それなら、気をつけます」
徐々に、気持ちが落ち着いていく。同時に、生来の商人（とは違うが）魂も再び呼び覚まされる。にっこり微笑む、外見少年、中身青年。これは、金ヅルだ。人一人泊まったくらいでは、多大なる借金のホンの一部にしかならない。しかし、考えを転じれば、それだけの足しになる。塵も積もれば山となるのだから。
「ウチは、料金前払い。食事代は別途。それでもいいなら早速手配するよ」
冒険者への気持ちが完全に善処されている訳ではないので、ちょっと嫌味な感じの口調も忘れずに。
「それは良かった。シスター、こちらの司祭はいつ頃御戻りですか？」
「明後日までは戻ると思いますが……。あの、私がいうのも何ですが、ウチの司祭様はごくごく一般的な司祭ですわよ？」
「念の為です。後は、折角来たのですから村を見て周りたいですし。……ちょっと色々確かめたい事が出来ましたし」
ルカは、首を傾げながらも「そうですか」と短い返事を発するのみだった。
「じゃあ、早速案内お願いします」
「了解！」
互いの苦しい部分がどうしても身近になってしまって、気付かないけれど。労働者にも事情がある、そして冒険者にも苦悩がある。

捕らえ方は、人それぞれだけど。少なくとも、ここにいる一同は何かを学び取り。そして、心新たにそれぞれの役割を果たしていく。

この先なにが起こるのかはさておき。これにて、教会での騒動は一応は一件落着。

「ちょっと待ちやがれ！フレオ！」

まだ終わってないぞとばかりに『魔王様（仮）』が待ったをかけた。騒動は、もう少し続くらしい。

7

「力も使えないお前に何が出来る。その気になれば、僕は今ここでお前を亡き者にする事もできるんだ。しないのは、そうしたところで、何の解決にもならないからだ」

話の内容がさっぱり解らない労働者一同は、ただの傍観者と化している。

「はっ！　俺様が力を戻した時、同じ事が言えるのかよ。さあ、そこのシスター！さっさとこの指輪を外せ」

勢い良く、指輪を嵌められた手を差し出すイーダに対し、一瞥を浴びせながらルカは、

「イヤですわ」

「「早っ！！」」

凛と響く声できっぱりと、否定の意を返した。傍らのエリスとリイダが思わず突っ込みをいれてしまった程の瞬殺で。

「なっ、てめぇ。ふざけ……。がふっ！」

腰に佩いた剣で、急所を突かれ、床に尻餅をつくイーダ。労働者一同はまじまじとその光景を見つめる。エリスはゆっくりと視線をフレオに移し、おそるおそるたずねる。

「……あのさ、改めて聞くけどさ……。魔力封じられているとは言え、この弱っちいヤツがホンット―に、魔王なの？」

「……らしいですよ」

「『らしい』って何よ！」

「だって、本名は凄い長くて本人も言えないらしいし。しつこく魔王を主張するもんだから。面倒になっちゃってああ、そうなんだなって割り切っちゃいました」

掌返して、溜息を付くフレオに、イーダが鳩尾の辺りを摩りながら反論体勢に入る。……という試みは、エリスとルカがそれはもう萎縮する位の形相で見下ろしているという行為によって遮断された。

始まったな。荷物を抱えながら、静かに礼拝堂の座席最後部に移動し、限りなく離れるリイダ。元々我の強い二人が、結託したら何が起こるか、彼は長年の付き合いをもってよぉーく知っている。その威力たるや、一足す一は二なんて次元じゃない。逃げないで、教会から去らないのは、勝手に逃げた場合、後から非常に怖いことが待っているからだ。８歳の夏。うっかりそれを忘れて、身に降りかかった事は生涯忘れられないと思う。恐怖に怯えていた数ヶ月がウソの様に、今はもう傍観する事に慣れてしまったけれど。

でも、それも何だか、逆に裏寂しい気持ちがするのは何故だろう。答えに行き着いた所で、何とかなる訳じゃないから考えないけれど。１つ溜息をついて、修羅場予定地点を目にしたリイダは、ある事を忘れている事に気付いた。そこには、顔面蒼白で絶句しているフレオの姿があった。

（ごめんなさい、でも今更そこには近づけません）

謝罪の意味も込めて軽く、頭を下げた。冒険者の視線は目の前の光景に釘付けで、リイダの事など無関心だった。

慈悲深き御父は、平安を取り戻すため、時には非情なる心をもって人間を粛清する時もあるという。昔、教会学校のシスター＝ティーザから聞かされたことを何となくリイダは思い出していた。そういや、いつも今頃の時間はいるはずだけど、どうしたのだろうか。司祭に同行しているのか、奉仕活動に出ているのか。解らないし、聞きたくても今は聞けない状態だから、どうしようもないけれど。はっきり言えるのは、今のこの状態を見たら卒倒寸前くらいは行くんだろうな、という事だけだ。『だけ』で済む問題じゃ、もちろんないけれど。

清廉なる気が満ちるはずの教会。満ちるのは、殺気にも似た、張り詰めまくった空気。哀れ余波を受けまくっている冒険者は、もはや硬直寸前。苦虫潰した様な顔で、少女２人を凝視しながらしゃがみ込んでいるの魔王（仮）の方がまだマシな状態だ。

「魔王を騙って、気の毒な方に害を為そうとするなど……卑劣極ま

りないですわね」
「いや、俺は別に騙ってなんか……」
「お黙りなさい！」
可憐な容貌に似つかわしくないほどの厳しい口調をもって、睨みつけるルカ。
「はっ、これしきの事で足腰立たなくなっているくせに。ちゃんちゃらおかしいですわ。ねえ、エリス？」
「そうそう。魔力無くなるだけでこんなんじゃ本物の魔王が卒倒するわよ。これだったら昼間、追っ払ったスライムの方がよっぽど張り合いがあったってーの」
「……スッ……スラッ……」
まるで自分が魔族最弱と言われているかのような信じられない台詞には、絶句するイーダ。魔王ではないとしても、人型の魔族だと言うのに。ちなみに、魔族では当たり前の情報が、意外と庶民には伝わっていないという事実をイーダは知らない。
神聖術をもっているだけあって、ルカは知っているが、今はさくっと無視を決め込んで、エリスと同意を決め込んでいる。そのエリスはと言えば、腕与しながら、ニヤニヤと笑っている。
「まあ、よくよく考えてみれば。魔物が蔓延っていなければ冒険者もいらない訳だし？　……さぁて、どーしてくれよーかな？　ルカの神聖術で痛い目に遭わすってのはどうよ」
「エリス。今まで何度も説明しませんでした？　神聖術は基本的には護りの術なのですわ。種族問わず、危害を加える事は出来ません。ああ、この方が命ない存在であれば浄化は可能ですけれどね。ゴーストとかスケルトンとか」
「あー、そーやそう言うもんなんだっけ」
「でも貴方は女の子だけど体力はあるから……まあ、それなりの事は出来るのではありませんの？」
「まあね～。お母さんと二人三脚で一生懸命宿屋切り盛りしているからね。体力は自信満々よ」

いかにも楽しげな表情のエリスを、あくびしながらリイダは思う。準備中の札だけカウンターに置いて、放置している人間が何を言ってるんだか。多分今頃は、買い付けから帰って来た、彼女の母親がさぞや慌てているに違いない。それ以前に、体力と腕っぷしは比例しないと思うのだけど。

「よぉーし。ええとー、とりあえずは往復ビンタあたりからかなー。軽く百連発ほど」

「あわわわわわっ！　まってくださぁい！」

嬉しそうに、素振りを始めるエリスに待ったをかけたのは、両腕を一杯に広げて立ちはだかっているサシィの姿だった。しかし、いかんせん掌サイズの小人さんなので、立ちはだかっているとは言いがたい。

「サシィ……お前……」

「たしかに、イーダは典型的ないばりんぼ魔王で、少しは痛い目に遭わないといけないわがまま男だけど、百連発なんか受けたら再起不能になっちゃいます！　打たれ弱いから！　ああー、もしかしたら死ぬかも！」

「……てめえにちょっとでも期待した俺がバカだった……。まあ、庇ってくれたのはありがとよ」

魔族達の会話を受けて、殺気立っていたエリスとルカは、急にキョトンとした表情になる。おずおずと、エリスがしゃがみ込んでサシィと視線を合わせる。

「えーと、サシィちゃんっていったっけ」

「サシィでいいですよー」

「じゃあ、サシィ？　今この人の事魔王って言ったわよね」

「言いましたですよ。一応こんなんでも、私たちの世界『ローディス』の第百五十六代魔王ファレ……えっとぉ」

何回か首を傾げた後、開き直ったかのように、右腕を上げながら、サシィは高らかに宣言するような仕草をとった。

「と……とにかくイーダは本当に魔王です。それは確かですぅ」

「お前主人の正式名も言えねーのか！」
「むぅ。イーダだって、自分で自分の名前言えないくせにッ。舌噛むくせにぃ！」
「るせぇな、文句なら親父に言いやがれ！」
暫くの間気圧され続けていたイーダも、使い魔につられて、いつもの調子を取り戻しつつあった。
「魔族にも親なんているんだ」
「いますよぉ。イーダのお父様……先代の魔王様は本当に立派な方だったのに……、ああ、サシィは『ローディス』の未来が心配です！　三代前の魔王様の御代からお仕えしてきて、初めてですっ！　こんなに、苦労が絶えない時代は！　いくらなりたての新米魔王だからってー！」
泣き真似しながら、叫ぶサシィの姿に、「苦労していらっしゃるのねえ」なんてルカが目を潤ませながら頷いたりしている。それにしても。エリスとルカは小さな体の可愛らしい魔族を見て思う。三代前からって、一体この子は何歳なのだろう。
「ところで……お話を聞いてもしやとおもったのですけれども……。ようするに魔王は世襲制なんですの？」
「です。イーダは、先代様の一人息子なのです。兄弟姉妹は他にいらっしゃいません」
一気に脱力を覚える二人。国王の息子である王子が、時代の国王になるのは世界の常識。ならば魔物の世界も同じで、魔王の息子だから、魔王。人間世界の通説としての魔王と言えば、魔族最強が基本。しかし、それは勝手な印象であって誰かが直接確かめた訳ではない。理屈では解っても、納得するのはどこか腑に落ちない二人であった。
「サシィ、そう思うんだったらな。尚更真面目に補佐しやがれ！　大体魔王の勤めを全くこなしていない訳じゃないだろうが！　次代の血を残すべく伴侶探しに没頭する事だって、立派な帝王学だ！」
「なーに、カッコつけてるんだか！　勉強なんかいっつもサボって

たくせにー！」
「……魔王」
　呟きに一同が、振り向くとそこにはようやく正気を取り戻したらしいフレオの姿があった。微妙に口の辺りを引きつらせている。
「何だ、フレオ」
「この際だ、改めて言っておく。僕はお前の伴侶になる気はこれっぽっちもない！　お前の勝手なシュミで解呪を阻止されるのはもう迷惑だ」
　沈黙がほんの僅か流れ。
「「はぁ――――――――――――――？！」」
　割れんばかりの女性陣の声が、教会全体を揺らした。黙って傍観していたリイダも、理解不能のフレオの台詞に目を瞬かせている。
「趣味たぁなんだ、俺は純粋に綺麗な少年が好みなだけだ！　二十過ぎの人間の男なんか、ごつごつしてて抱きしめられやしねえじゃねえか！」
「それをシュミって、言うんだよイーダ。確かに魔族の間じゃあ、男同士でも問題ないけどさ。人間さんとの常識の違いってものがあるんだから」
「人間どもの常識なんぞ知るか。俺らの国であれば、俺らの常識に従うのが常じゃねえか……って何だその素振りは！」
　ヒュンヒュンと近くの人間には十二分に聞こえる音で平手打ちの予行演習をしているエリス。何を考えているのかわからない、無表情をその顔に浮かべながら。
「男の方の……いえ、全生物の風上にもおけませんわね。いいえ、存在意義すらあやしいですわ」
　素振りをやめ、ボキボキと指を鳴らすエリス。
「サシィ、ゴメンね。貴方のご主人様、やっぱおイタが必要みたい。えーと、どの程度なら耐え切れるかしら？」
「あら、容赦なくやってしまいなさいな。この方が魔物を外界に逃がして、私達に迷惑がかかっているのは事実。その分も含めて……

ね」
「えーと、魔物を放っているのは別の世界の魔王さんですー」
また、新たなる魔族の情報が飛び込んで、エリスは戦闘態勢一旦解く。そんな彼女に使い魔は、人間が思っている所の「魔界」は三つに分かれている事実を告げた。魔族の世界も複雑なんだね、という程度で流されたが。
「なる程、でもだからといってフレオさんにした狼藉が免ぜられる訳ではありませんわね。さあさあ、エリス」
「むー、じゃあせめて十発くらいにしておいて下さぁい」
「サシィ！　く……冗談じゃねえ！」
ようやく動くようになった足腰を持ち上げ逃げようとしたイーダであったが、それを上回る素早さをもってフレオが羽交い絞めにする。
「今までの恨み、ここで晴らしたい所だけど。とりあえずはエリスさん、貴方からどうぞ。なんなりと」
「サシィ！　この、不忠者が！」
「これも試練だよ。イーダ」
「ふざけんな――――――！！！！！」
魔王の悲痛な訴えと。
「じゃ、いっきまーす！」
利き手を振り上げるエリスの楽しげな声と。
「こ…これは一体何事なのです！！！」
女性の激しく、厳しい叫び声が、ほぼ同時に響き渡る。
「あ、ごきげんようです。お帰りなさい、シスター＝ティーザ」
「あ……ああ……、ごきげんようリイダ……。って……ああっ！」
絶叫しながら指し示す先には、無残に砕け散った御父の像。
声にならないうめきを挙げながら、血の気を失って仰向けに倒れるのをリイダが慌てて支えた。
「ああ……なんて事でしょう……私達のお父様が……ううーん……」

三人組の所業に慣れっこなはずのティーザも、さすがにこれには参ったらしい。神の像は、教会の象徴なのだから。でもただの彫刻じゃんと思う気持ちは、口には出さないでおいたリイダであった。
「シスター、お留守の間にこんな失態申し訳ありませんでしたわっ」
駆け寄り、ティーザの手をそっと自らの両手で包みながら目を潤ませているルカ。さっきまでの、魔物顔負けの気迫はどこへやら、である。
「普段どおりお勤めをしておりましたら……突然、こちらの方が、押し入ってあっという間に……ッ！」
涙を流しての熱演、呆れを通り越して拍手したくなる、見事だ、見事すぎる。思えば、この見事な演技をもって多くの迷える子羊の心が癒されているのも事実なのだけど。ちなみにその大半が男性というのは、余談だ。
「まあ……なんという……」
まだふらつきながらも、ティーザはルカの手を借りて立ち上がる。
「こちらの冒険者の方が駆けつけていなかったら、どうなった事か……」
え、と漏らしながらも、いやあそれほどでも、と乾いた笑いをもらしつつ演技にのっているフレオ。礼儀正しいようで、実は結構ちゃっかりした性格なんだなーとリイダは冷静に分析していた。
「と……とにかく自警団に知らせなければなりませんね」
「お待ち下さい！　シスター。司祭様が不在の今、事を荒げてはいけませんわ」
「それはそうねルカ。でも…かといって、その人を無罪放免にするわけには……」
「ええそれはそうなのですわ。それでシスター？　私考えたのですが」
手を組み、切なる訴え（見かけだけ）をルカは発する。
「神へ対する冒涜は、神への奉仕で償うべきです。どうでしょう、シスター。丁度人手不足だったのです、この方に奉仕活動をして頂

くのです。我が教会は幸いにも男子禁制ではございませんし。そうすれば私達の負担も減りますし、この方もきっと悔い改めて二度とこのような事はなさらないに違いありませんわ」
　ああ、そういう手があったかと手を打ち鳴らすエリスと、すかさず突っ込むリイダ。対象であるイーダは、聞き捨て成らんと目を見開いていたが、その口はフレオによって封じられていた。もがいている間にも、魔王の気持ちとは裏腹に話は進む。
「それは……いい考えだけど。司祭様の不在中に勝手な判断もしてはいけないわね。とりあえず、司祭様がお帰りになるまで仕方ないけれどこちらにいてもらいましょうか」
「そうなさいませ。シスター、少しお休みになって下さいませ。まだ顔色が芳しくないですもの」
「もうそれ程支障はないけれど、ちょっと遠出の疲れもあることだし……お言葉に甘えましょうか。じゃあ、後はよろしく頼みましたよ、ルカ」
　言い置いて、立ち去るのを確認すると、途端に天使の微笑みは、悪魔の微笑に変化する。
「そう言う事なので、しばらくの間我慢してくださいましね。イーダさん」
　相変わらずの微笑を携え、ぼそりと呟いた一言を、その他一同は忘れないだろう。
「魔封じの指輪三万リーク、神像の修復代……最低四万リーク……。計七万リーク分、しっかり体で返して頂きますわよ？」
　鼻で笑いながら、トドメの一言。参考までに、教会の生活費は一日五リークが目安である。質素倹約を努める教会は、とにかく徹底的に質素だ。ちなみに収入源は、奉仕活動で作った焼き菓子や、日常雑貨の収益のみだ。賃金などという言葉は、存在しない。
　奉仕活動……別名は「タダ働き」
「ふざけんな――――――ッ！」
　魔王サマの切なる叫びは、徒労に終わる。慈悲深い神は、粛清を

もって、憐れな魔王を諌める道を選ばれた。……かは、知らないけれど。

＊　　＊　　＊

嵐が去った後に残された者達は大きな溜息をついた。安心感と同時に、一気に疲れが押し寄せるような、経験の無い感覚が一同を満たしていた。

「一応一件落着……なのかな。じゃ、行こうかエリス。フレオさんも」

「あれ？　なんでリイダもついてくるの？」

「だって、まだ配達の支払い終わってないでしょ。金庫の鍵はここにないんだから」

「ああ、そっか」

まさか真面目に忘れていたんじゃないだろうな。思わず、荷物を落としそうになる。

「……おいおい。それにしても、エリス……大丈夫なの？」

「え？　全然大丈夫だよー。それよりも、稼がなくっちゃ借金も返せないしね！　今止めたらただ路頭に迷うだけだし？　それよりはマシ！」

「……本当に前向きだよね、エリスって」

いくらなんでも立ち直りが早過ぎだ。

（ま、それがエリスのいい所なんだけどね）

思った事は敢えて黙っておいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0416u/

おいでませ冒険者！

2011年10月1日03時17分発行